ドクターのヒューマンドキュメント誌

DOCTOR'S MAGAZINE

ドクターズマガジン

5
2020
No.247 May.

ドクターの肖像 #244

細川 亙

独立行政法人 地域医療機能推進機構（JCHO）
大阪みなと中央病院 院長／美容医療センター長

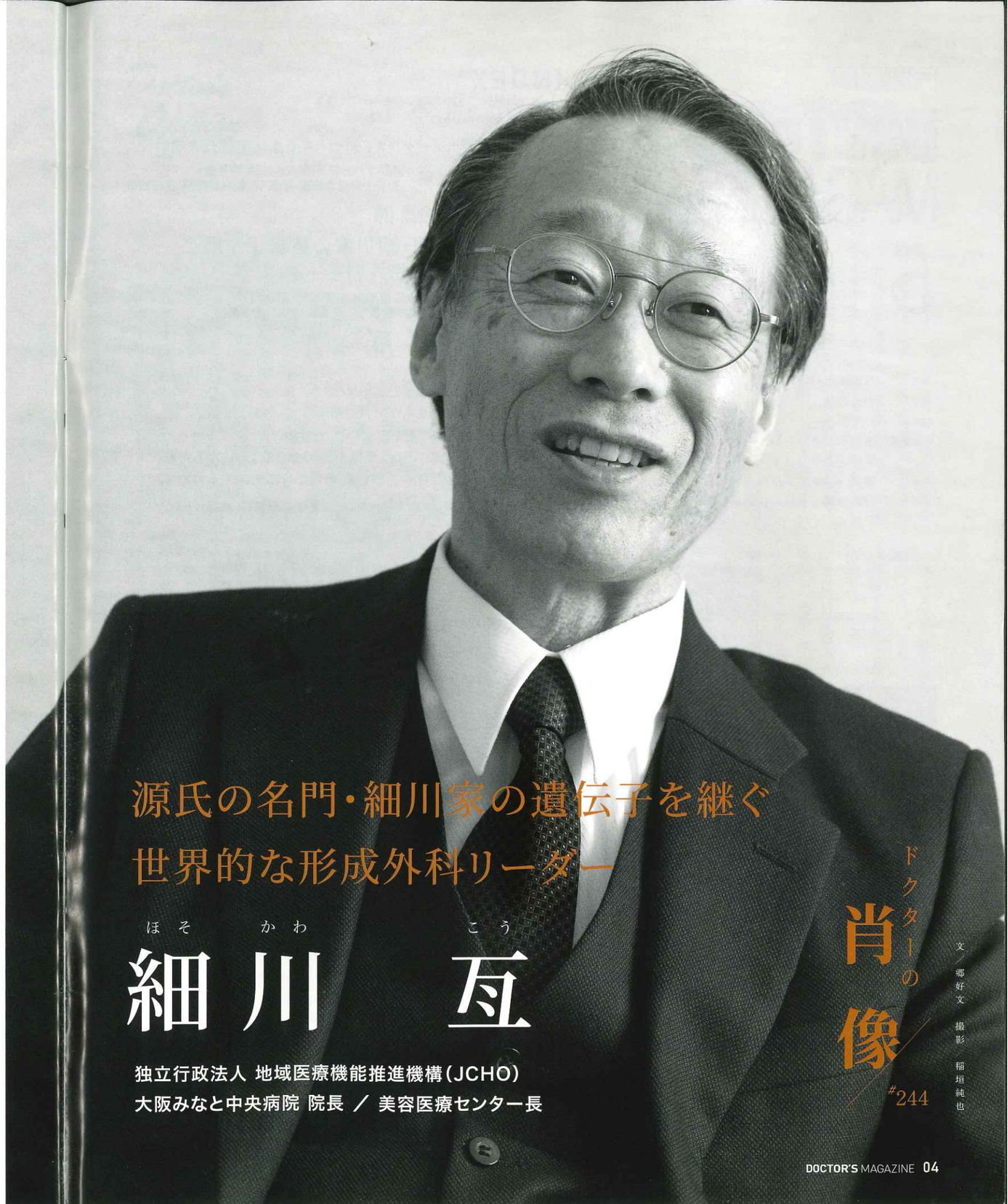
Challenger ―挑戦者―

広域医療法人EMS 理事長
松岡救急クリニック 院長

松岡 良典

FORTE ―日本列島病院探訪―

高知県立あき総合病院



ドクターの肖像 #244

文／郷好文　撮影／稲垣純也

源氏の名門・細川家の遺伝子を継ぐ世界的な形成外科リーダー

細川（ほそかわ）　亙（こう）

独立行政法人 地域医療機能推進機構（JCHO）
大阪みなと中央病院 院長 ／ 美容医療センター長

大阪大学医学部に入学するも心躍る法学を独学し始める

大阪大学医学部に進んだ細川亙（こう）氏が、書店で手にしたのは憲法学の権威・宮沢俊義氏の『日本国憲法コンメンタール』である。法律を作るにも、解釈するにも、物事に対する姿勢が大事だということを細川氏は知った。

例えば、同じ罪を犯した二人がいるとしよう。一人は年収100万円、もう一人は年収1億円。罰金刑を与えるとして、いずれも100万円の罰金刑に処するのは公平な罰なのか。社会のあるべき姿をどう考えるかによって、作る法も、法の解釈も変わる。法律書を読んでいると、その奥深さに細川氏の血は沸き立った。

医学部3回生の細川氏には、医学がつまらなかったのだ。医学生は膨大な知識をひたすら記憶する。例えば、脳は1300gほどの中にどれだけの構造、機能、連携などが含まれているか。体各部の解剖学、それ以外にも、薬理学、生理学、組織学、病理学、遺伝学、放射線医学、公衆衛生学、法医学、細菌学など、覚えるべき事実が多くある。医学部では将来の職種がほぼ決まっていることにも抵抗があった。

「医者になるしかないのか……」

医学部進学は自身の希望というわけではなく、母の意向に沿って大阪大学医学部に進学しただけだった。

細川氏は、医学部に通いながら心躍る法学を独学し始めた。憲法・刑法・民法の教科書や『判例百選』、「ジュリスト」などの法学系ジャーナルも読みあさり、1年後、腕試しに司法試験を受けた。2次は短答式試験、論述式試験に分かれるが合格率は2%という超難関だった。合格率10%の短答式試験はパスしたが、論述式試験の勉強はしておらず、1年後に再受験。再び短答式試験をパスし、今回は論述式試験に挑んだが不合格だった。当時、地方公務員の父もすでに定年退職しており、不確かな将来を選ぶ余地はないと判断し、やむなく法学を諦めた。

医学生でありながら、医学よりも法学を好んだ理由は何だろうか。彼のルーツを探ってみよう。

源氏の名門・細川家の末裔 先天的な帝王学の遺伝子

細川氏の父は熊本県立保母養成所の所長で、7歳上の長兄は経産省へ、5歳上の次兄は財務省へ進んだ官僚家系である。三男の亙少年は「兄弟げんかという戦国時代」から処世術を学んだ。子供同士の関係とはいえ、常にある種の緊張がある兄弟関係だった。力のない年少者が日々の兄弟関係の中でどの位置に立ち、どのように振る舞うべきか考えた。時には泣きまねで母を味方に付けることもあった。劣勢を跳ね返す知恵も蓄えた。そしてそれは後年、通称「くまたか」（熊本県立熊本高等学校）で、生徒議会の議長や、生徒会の副会長として群雄の意見をまとめるリーダーシップへと進化する。当時は学園紛争真っ盛りの時代だ。

「授業を公欠し、クラス代表を集めて生徒議会を開き、熊本県への要望案や学内自治規範案を議決するため夕方まで議論しました」

そのため議長時代には、エマ・A・フォックス著『会議の知識』という米国の会議運営書なども熟読し、会議の本質や運営理論をたたき込んだ。甘えを許さない兄弟関係、生徒たちを動かす情報収集力と状況判断、社会のあるべき姿を思索させてくれる法律の学び。細川氏には、こうした育ちの環境だけでは語れない先天的な帝王学の遺伝子がある。

「元々関西が地盤の家系です」

生まれも育ちも熊本なのにそう言うのは、清和天皇から続く源氏の名門、細川家の末裔だからだ。近世細川家の祖とされる細川藤孝は大阪和泉の守護大名家の血筋である。最初に京都長岡京の勝龍寺城を建て、その後丹後に移封されるなど地盤はずっと京都や大阪だ。

藤孝―忠興―忠隆と細川氏の系図にある武将たちも、非業の最期を遂げた細川ガラシャも関西で生きた。細川氏の先祖が熊本に移るのは忠隆の死後である。忠隆の子供が一門筆頭の支流「細川内膳家」という扱いで熊本に六千石を与えられたのだ。細川氏に、細川家のどの人物に魅せられるか？と聞くと、間髪を入れずに答えた。

「圧倒的に細川藤孝です」

写真で見る
軌跡
Doctor's HISTORY
Ko Hosokawa

藤孝は幽斎という剃髪後の名でも知られているが、将軍足利義輝に仕えて足利義昭の将軍即位を助け、その後、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康と替わっていく天下人全てに重臣として仕えたまれな武将である。剣法、弓術などの武術にとどまらず、和歌なども当代随一との評価を受けた文化人でもある。四百年の時を経て、藤孝末裔の細川氏もまた、形成外科学という新しい分野を変革した。ここからは時代の針を細川氏の大阪大学医学部卒業後に移して、話を進めよう。

皮膚科入局で二つの気付き 診断学より治療学を究めたい

細川氏が卒業後の進路に選んだのは、大阪大学皮膚科である。皮膚科学教室という小組織なら派閥争いとは無縁だと考えたのだ。

「それは大間違いでした」

多士済々が互いに譲らず、人事は停滞し、研究室間でいがみ合っていた。決断は早い男である。5月に入局するも7月の正式採用前に離局を決意。しかしこの皮膚科学教室でもいくつかの気付きがあった。一つは「皮膚科は診断学が中心で治療学には深みがない」こと。当時の皮膚科は病変に診断をつけるまでが勝負で、後は軟膏を塗る、薬を飲ませる、紫外線を照射するなど治療法は決まっていた。年月をかけて治療技術を習熟していくタイプの診療科ではないと感じた。

別の気付きは、「皮膚科臨床で一番難しいのは皮膚病理診断学」であること。皮膚病理診断能力に長けた人は皮膚科医の中でも数少ない。診断能力が低い医師ほど良性か悪性か判断しかねる「グレーゾーン」の幅が広くなる。細川氏は、皮膚科学教室にいたわずかな期間に皮膚病理診断の難しさと危うさを知り、その後の形成外科医人生に役立てた。悪性黒色腫、皮膚付属器悪性腫瘍、脂肪肉腫、血管肉腫などという病理診断名が付けられた患者の中に、実は「白」の患者がしばしばいることを知った。

住友病院で形成外科を学ぶ 新規手術法の英文論文4本

細川氏は皮膚科医時代に、週1回住友病院形成外科に皮膚外科研修として通っていた。そこで先天性鞍鼻（あんび）の強烈な症例に出合う。鞍鼻は外鼻が陥没状態になる奇形あるいは変形である。ある若い女性患者の形成外科手術前後の印象はまるで違った。術前は正面から見ることもはばかられる外貌であったのに、術後には見違えるほど知的な風貌に変わっていた。

「彼女は全く別の人生を歩むことができる。形成外科は素晴らしい！」

住友病院は大阪で最も早く形成外科診療を始めた病院である。率いていたのは形成外科のメッカである東京警察病院で学び、ニュージーランドに留学した薄丈夫（すすきたけお）部長。1975年に形成外科が標榜科として公認された黎明期に、薄氏は松本維明（これあき）氏と菊井知子氏を加えて形成外科診療科を住友病院に創設した。そこに1980年から加わったのが細川氏と田原真也氏（後に神戸大学形成外科初代教授）である。松本氏は1980年夏に、皮膚科内形成外科診療班を設立するため阪大に移ったので、住友病院形成外科は薄、菊井、田原、細川の4人体制となった。

「分からないことばかりでした」

薄部長は何冊もの英文ジャーナルを読んでいた。新人の田原氏や細川氏にそれを読めとは言わなかったが、日々の会話の中に話題が織り込まれる。すると読まないわけにはいかない。そうして論文を一つ読むと、分からないことが多くある。ジャーナルを読んでは知らないことを調べ上げる日々が続いた。

薄部長からは形成外科技術や知識だけでなく、医療に対する姿勢を学んだ。薄部長はフェイルセーフを十分考慮したうえでの医療技術向上に大変積極的であり、従来の方法をただ漫然となぞるような医療を良しとしなかった。

このような生活を続けていると自然と論文が書けるようになる。5年間の住友病院勤務のうちに筆頭著者で英文論文を4本書いた。第4中足骨短縮症の手術治療、眼輪筋皮弁を用いた眼瞼黄色種治療など、細川氏が考え出した新規手術法の論文である。

形成外科医人生の打破のため 新設香川医大で助手就任

住友病院形成外科に5年在籍し、当時の形成外科診療の全レパートリーをマスターした。田原氏と共に全く新しい「血管柄付き遊離組織移植術」を習得して導入もした。しかし、細川氏は1年後の自分を想像すると今の自分と変わらない姿が浮かんだ。成長に飢えて今後を思案していたころ、中国・四国形成外科学会の地方会に出席した。その立食懇親会の席で、香川医科大学の形成外科医が、同局で助手を募集していることを知る。新設医大の形成外科での助手なら、マンネリ気味になっていた形成外科医人生を打破できると思い、細川氏は「行きます！」と手を挙げた。

1985年、香川医大に着任。上司は東京警察病院で形成外科を修練した秦維郎氏（後に東京医科歯科大学初代教授）である。細川氏は、ひたすら動物実験室に通った。「軟骨膜移植による軟骨再生」などの実験的研究を行い、博士論文を含む多くの学術論文を書いた。しかし研究漬けの生活を続けようとは思わず、海外留学をしようと考えたが、希望する病院とタイミングが合わなかった。

そこで、アルバイトをしていた丸亀市の病院に形成外科をつくってもらうことになった。しかしさほど需要があるわけではない。

「週3日勤務で、給料も半分にしてください」

こんな交渉をして、大阪から丸亀までの新幹線通勤が始まった。週4日の休みは子供を連れて公園で遊んだ。そこにいた主婦からは冷たい視線を浴びた。余談だが、週3日の丸亀での勤務は、半分の給料でも大学の給与よりはるかに多かったという落ちもついた。

1990年、住友病院に戻ると、かつてのように豊富な症例は集まっていなかった。大阪府下の大学や市中病院で形成外科診療をする所が増加していたからだ。それに加え、細川氏自身も形成外科医としての技量が上がり、市中病院のCommon Diseaseでは満足できなくなっていた面もあろう。自分を生かす場は、3年後に巡ってきた。

魚釣りで遊んでいた中学生のころ

6歳のころ。家族と

生後6カ月

長男と囲碁をする細川氏

順子夫人との結婚式

阪大形成外科新設を成し遂げ初代教授に細川氏が就任

大阪大学の皮膚科学教室内に形成外科診療班は、1980年に発足したが、教室に昇格できず十数年が経過していた。形成外科診療班を今後どう存続させるかが懸案事項となっていた。

当時、国立大学で教室を新設するには多くのハードルがあった。病院と学部で新設要求が承認された後、全学レベルで他学部からの要求事項に打ち勝ち、文部省に新規概算要求し、最後に大蔵省でも認められ、国会での可決を得てやっと認められる。

さらにそのころ、阪大では皮膚科教授選に絡む「お家騒動」があり、形成外科診療班を総替えしようとしていた。その影響もあって、阪大皮膚科内形成外科診療班と住友病院形成外科との関係は険悪であった。だが、診療班の存続と、教室の新設は阪大形成外科班員たちの悲願だ。内部では細川氏に白羽の矢を立てようとしたが、彼は敵対する住友病院派である。細川氏にしてみても、敵方トップへの就任の打診と受け止めた。

「自分はこの母校の状態を座視していていいのか？ 母校での形成外科の発展に一役果たせるだろうか」

細川氏はそこで初めて大学人事に乗った。ただ阪大形成外科班員たちは、阪大と敵対する住友病院から直接トップを迎えることを認めなかった。細川氏は大学人事でいったんは関西労災病院形成外科部長職に就き、後に阪大皮膚科学教室（吉川邦彦主任教授）へ形成外科担当講師として着任した。

阪大に復職した1994年からちょうど5年後の1999年、ついに阪大病院に形成外科が新設され、細川氏が初代教授に就任した。細川氏は、5年間全力疾走してそれでも形成外科が新設できなければ、「城主」を辞すつもりだったという。思い返せば文部省に新設の陳情に行った時、役人から言われた一言が痛烈だった。

「阪大ともあろうものが今さら形成外科新設をご希望ですか」

確かに東京大学に遅れること約40年での新設だった。阪大系の形成外科医たちにとって20年も待ち続けた悲願、形成外科の新設が果たされた。細川氏は次の目標を定めた。

「阪大形成外科を他学に追いつかせ、日本一の形成外科にする」

阪大形成外科の大躍進 日本人初・米国学会名誉会員に

細川氏はまず診療科としての形成外科の存在感を大きくしようとした。形成外科疾患を診療するだけでなく、他科の応援手術を重視する方針をとった。細川氏の着任前には年30～40件だった他科との共同手術が、着任後は100件を超え、退任直前には300件に達した。耳鼻咽喉科や脳神経外科に始まり、皮膚科、眼科、乳腺・内分泌外科、消化器外科、心臓血管外科、産科婦人科、泌尿器科、整形外科などに形成外科技術を提供。他科が想像だにしない手術まで提案し、形成外科の領域を広げた。

また、学術論文の量産を企図した。臨床論文は市中病院時代からお手の物だ。2002年には世界で最も権威のある「Plastic & Reconstructive Surgery」という英文誌で細川氏の年間論文数（共著を含む）が日本人としてトップ、全世界で3番目になった。

新興の弱小勢力だった阪大形成外科は全国で急速にその評価と知名度を上げていった。細川氏は日本形成外科学会で頭角を現し、理事長時代には日本医師会雑誌史上初の「形成外科特集」も実現させた。また、全国の大学に形成外科をつくるように働きかけ、日本の形成外科全体を押し上げる活動に注力した。日本形成外科学会創立60年の還暦記念総会・学術集会会長職にも指名された。2017年にはアメリカ形成外科学会（ASPS）が細川氏をアメリカ形成外科学会名誉会員に推挙した。日本人としては史上初、アメリカ人一人を含め約100年間の学会史上全世界で7人のみというまれな栄誉の賞である。

「アメリカ形成外科学会からは名誉会員証と“White Coat”をいただきました。“White Coat”はマスターズのグリーンジャケットよりも希少で価値があると思います」

こうして、阪大形成外科の新設当初に自身に課した「日本一の形成外科にする」という目標も実現させた。

症例ごとにデザインする手術 人生を前向きに変える医療

「形成外科の中で何が専門なのですか」

そう聞くと「ほぼ全ての形成外科分野の手術治療」という答えである。形成外科が取り扱う疾患の種類は驚くほど多い。ほとんどの形成外科医はいずれかの分野に特化しているが、細川氏の場合、顔面外傷、唇裂・口蓋裂、眼瞼下垂症、小耳症、多指症、合指症、腋臭症、顔面神経麻痺、乳がんの術後の乳房欠損、悪性黒色腫を含む各種の皮膚悪性腫瘍、皮膚良性腫瘍、漏斗胸、褥瘡、虚血性潰瘍、眼球突出など、新奇な治療法を広範に開発している。形成外科手術は外科の胃切除術などとは違い、決まったパターンというものがほとんどない。症例ごとにどのようなデザインでどう手術すべきかを考えなければ、良い結果は出せない。

記憶に残る患者について問うと、全身熱傷の患児のことを話し始めた。前医治療後に残った瘢痕拘縮のために立つこともできない男児がいたという。細川氏による数度の瘢痕拘縮除去、皮膚移植手術などで機能は改善し、日常生活での不便さはほとんどなくなった。しかし、顔も含めて全身に熱傷痕が残っている。この子がどんな人生を送るのか、心配しながら病院から送り出した。35年後、彼が大阪みなと中央病院を訪ねてきた。結婚の報告である。

「手術のおかげで前向きになれたと言うのです。彼の人生に対する前向きさが伴侶を呼び寄せたのだと思いました」

形成外科は、人生を前向きにさせるチャンスを与える医療であることを証明する一例である。

「純表皮移植」の驚くべき発想 皮膚移植の常識を変える

「それは入れ墨の治療から始まりました」

1986年当時、皮膚から入れ墨を抜く治療では、表皮から真皮にかけての皮膚を剥いで捨てていた。細川氏が発想したのは、剥がした皮膚の再利用。ある酵素を使えば表皮と真皮を分離できるという知識を細川氏は持っていた。ディスパーゼという酵素で皮膚を分離して表皮と真皮とを分け、入れ墨の色素が入った真皮部分は捨てて色素のない表皮だけを創部に戻す。世界初の植皮法「純表皮移植」[※1]である。

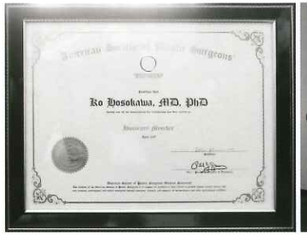
それまでの皮膚移植は、全層植皮や分層植皮と呼ばれ真皮を含むものだった。それらの移植皮膚はメスやカミソリというような道具を用いて採取されていた。酵素を

住友病院にて。薄丈夫部長、田原真也氏らと。前列中央が細川氏（1992年）

大森清一氏、秦維郎氏と。後列左端が細川氏（1987年）

初めての国際学会での発表

細川幽斎公没後400年祭（2010年）



アメリカ形成外科学会名誉会員授与式（2017年）右は Debra J. Johnson 理事長

アメリカ形成外科学会の“White Coat”

※1「Treatment of tattoos with pure epidermal sheet grafting.」Annals of Plastic Surgery（1990年）

形成外科は人生を前向きにさせる チャンスを与える医療である

用いて移植組織を採取するという手法は、全外科分野においても世界初の手法だった。

全層植皮や分層植皮よりも薄く、生着も優れた「純表皮移植」は、さらに驚くべき特徴を有していた。

「採取した皮膚が移植先の皮膚の性質になる」

皮弁にせよ植皮にせよ、皮膚を移植した場合、その皮膚が元々あった場所の性質を移植先でも持ち続ける。例えば、腹部の皮膚を手のひらに移植すると、本来手のひらの皮膚では起こらない色素沈着が起きる。つまり腹部の皮膚の性質は、手に移植されても維持される。しかし、それに異を唱えたのが形成外科診療班に所属する山口裕史氏だった。

「山口君は純表皮移植では皮膚の性質が移植先の性質に変わるのではないかという。無理な仮説の研究はやめておけと言ったのですが……」

山口氏の頑固なところを買って挑ませた。すると、表皮の性質が移植先の表皮の性質に変化することを緻密な実験で証明したのだ。つまり表皮の特徴は表皮自身が決めるのではなく、表皮に接する真皮が決めているという事実を突き止めた。[※2] 数千年来の皮膚移植の常識が覆された。

「私がアメリカ形成外科学会の名誉会員になったのは、純表皮移植についての業績が評価されたのだと思います」

大阪みなと中央病院院長へ 美容医療センターも新設

「誰もできんというなら引き受けよう」

2018年、教授定年まで2年を残して細川氏はJCHO大阪みなと中央病院に移った。当時同院は、毎年数億の赤字を出し続ける病院だった。阪大の渉外委員会は、細川氏を院長に、と推した。

「できようとできまいと、自分よりもそのポストにふさわしい者がいなければ引き受けてやってみるしかない」

請われるまま細川氏は引き受けた。着任した4月、単月赤字が900万円だったのには仰天した。1年半後には新病院ができることが決まっていた。新しい病院で健全経営になるのか、減価償却の激増でいっそう赤字が増え、這い上がれない病院になるのか。

細川氏は自分でなければできないことは何かを考えた。一つは「美容医療」を始めること。細川氏は、市中の美容クリニックが未認可の充填剤であるフィラーなどを用いて起こす皮膚の壊死や失明、未熟な技術による合併症などについて以前から警鐘を鳴らしてきた。世の中に美容医療の危険性を警告するだけではなく、安心・安全な美容医療を自ら実践しようと考えたのだ。新病院には「ガラシャ」と愛称を付けた美容医療センターを新設した。

美容を病院の武器にするあたり、細川藤孝の田辺城籠城時の逸話を思い起こさせる。和歌に通じた藤孝は、古今和歌集の伝統を口伝する古今伝授の教えを受けており、彼の死によってそれは断絶してしまう。そのため朝廷が休戦を申し入れて落ち延びさせた。武人にして芸道を知るのは弱さではない。

「別の分野の視点を持っていることは力になります」

若き日の法学の知識は、学会や法人運営にプラスになる。何よりも、自らを正し、医療社会を正す視点を持つことができた。細川氏は大阪湾を背にする病院から、形成外科を武器に、さらなる世直しの一手を打ち込む。

第60回日本形成外科学会学術集会総会開催に向けての決起会ならびに
細川氏の日本形成外科学会理事長就任と還暦を祝う会（2015年）

※2 「Regulation of Keratin 9 in Nonpalmoplantar Keratinocytes by Palmoplantar Fibroblasts through Epithelial-Mesenchymal Interactions」Journal of Investigative Dermatology（1999年）

院長室に飾られていた関ヶ原合戦図屏風。
細川忠興陣

■ PROFILE　ほそかわ こう

1979年	大阪大学医学部医学科 卒業 大阪大学医学部附属病院 研修医
1980年	住友病院 形成外科 医員
1985年	香川医科大学 形成外科 助手
1990年	住友病院 形成外科 医長
1993年	関西労災病院 形成外科 部長
1994年	大阪大学医学部 皮膚科 講師
1997年	大阪大学医学部 皮膚科 助教授
1999年	大阪大学医学部 形成外科 教授
2001年	大阪大学大学院 医学系研究科形成外科学 教授
2018年	独立行政法人 地域医療機能推進機構（JCHO）大阪みなと中央病院 院長

■ 学　会

日本形成外科学会（理事長）、日本形成外科手術手技学会（理事長）、日本マイクロサージャリー学会（副理事長）、日本美容外科学会（理事）、日本頭蓋顎顔面外科学会（理事・監事）、日本創傷外科学会（理事）、日本褥瘡学会（評議員）、日本抗加齢医学会（評議員）、日本形成外科学会機関誌（編集委員長）、アメリカ形成外科学会（名誉会員）

■ 資　格

日本形成外科学会専門医、日本頭蓋顎顔面外科学会専門医、日本創傷外科学会専門医、日本形成外科学会皮膚腫瘍外科分野指導専門医、Doctor of Doctors Network 優秀専門臨床医

波瀾万丈
細川ガラシャの生きた
戦国時代